

## 賀川豊彦『死線を越えて』論

—— 女主人公・田宮鶴子から見えてくるもの ——

岩田 ななつ

### はじめに

賀川豊彦（1888～1960）の自伝的小説『死線を越えて』3部作<sup>(1)</sup>は、総発行部数四百万部を記録した大正時代最大のベストセラーである。

しかし、日本近代文学研究において、『死線を越えて』3部作の研究はあまり進んではいない。同時代の文壇は、「芸術として完成品であるかどうかの問題は別にして、一箇の人間の記録として極めて意義ある物であると思ふ」<sup>(2)</sup>と一定の評価を与えつつも、芸術作品としては認めなかった。その後の研究史では、「自己確立の書」（辻橋三郎「賀川豊彦の小説」）、「大正文学の一つの転機をなすもの」「プロレタリア文学としては先駆的な方向を与えた作品」（飛鳥井雅道「賀川豊彦の位置」）、「キリスト教における愛」「貧民窟ルポルターージュ」（関口安義「賀川の文学」）と、大正デモクラシーの時代の新しい青年像と思想、社会を描いた文学作品としての評価が試みられてきた。さらに、『死線を越えて』3部作が、大正9（1920）年から大正13（1924）年にかけてベストセラーになった理由を、武藤富男は「賀川の労働者に対する深い愛情と労働への尊重と労働者のために資本家と闘って行く勇気とは、『死線を越えて』ににじみ出て、無産大衆やインテリを引きつけずにはおかなかった。

(中略) 賀川の貧民窟における贖罪愛の働きが、万人の胸奥に靈感を呼び起こしたことである」<sup>(3)</sup>と述べた。

2009年9月13日の『毎日新聞』に、「キリスト教思想家で社会運動家の賀川豊彦が戦後間もない1947、48年の2年連続で、日本人初のノーベル文学賞の候補になっていたことが分かった。(中略) 賀川は54～56年の3回、平和賞の候補だったことも公式資料で確認された」と、ノーベル平和賞候補より早く、日本人初のノーベル文学賞候補になっていたことが報じられ話題になったが、賀川豊彦の文学の研究は進んでいない。

その原因を推測すると、社会運動家、キリスト教伝導者のイメージが強くて、作家としての賀川豊彦とその作品をどう評価すればよいのか、見えて来ないことが要因であろう。さらに、『死線を越えて』3部作を論じるならば、作品自体が長編小説なので、多様な視点で多角的に読み込む必要がある。例えば、「賀川豊彦はなぜ小説を書こうとしたのか」「明治学院時代の文学的環境」「島崎藤村、木下尚江、徳富蘆花、与謝野晶子、沖野岩三郎、加藤一夫、中山昌樹たちとの交流と文学」「大正デモクラシーの時代の新しい男としての主人公・新見栄一像」「新しい恋愛観」「ヒロインたちの新しさ」など、『死線を越えて』3部作を論じるだけで、一冊の研究書になるであろう。

本稿では、『死線を越えて』3部作論の第一歩として、賀川豊彦が描いた女主人公・田宮鶴子に注目して、『死線を越えて (上巻)』を論じてみたい。

## 1

ここで、筆者が賀川豊彦の『死線を越えて (上巻)』を論じる上で、女性主人公に注目する理由を述べておく。

「理由1」として、賀川が小説を書き始めた理由に、田宮鶴子のモデ

ルになった女性との自由恋愛と失恋があったこと。

「理由2」として、ベストセラーになったのは、賀川豊彦の描いた主人公・新見栄一だけではなく、女主人公たちにも読者は引き付けられたから、と推測できること。

「理由3」として、賀川は妾であった母や、義母たちを通して、家父長制社会の犠牲となった女性たちに深い共感を寄せていたこと。

以上の3点にそって、論じてゆく。

まず最初に、『死線を越えて（上巻）』の原型である「鳩の真似」（「再生」）を書いた理由と、その頃の賀川豊彦についてまとめておく。

長くなるが、やはり「『死線を越えて』を書いた動機」<sup>(4)</sup>の引用から始めよう。

明治四十年（明治41年－引用者注）の五月だつたと思ひます——さうです。もう丁度二十年も前になりますね、私が肺病で明石の病院から三河蒲郡の漁師の離れに移つた頃、独りぼつちであまり淋しいものですから、私は小説を毎日書き綴つたのでした。（中略）幻の中で過去の人間を小説として想ひ浮べてみたのです。さうでした、その前の年だつたと記憶します。私は小説が書きたかつたので、古雑誌の上に小説を書き綴つたことがありました。あまり貧乏で原稿用紙が買へなかつたものですから、古雑誌を原稿用紙代りに使用したのでした。そんなに私が小説を書きたかつた理由は、私の小さい胸に、過去の悲しい経験があまりに深刻に響いたことと、私が宗教的になつて行くことに依つて非常に気持が變つて来たことを、どうしても小説体を書きたかつたからです。書き上げた小説を、私は島崎藤村先生に一度見て頂いたことがありました。すると先生は、丁寧な手紙を添へて、数年間筐底に横へて自分がよく判るやうになつてから世間に発表せよと云はれた

のでした。

その後肺病はだんだんよくなつて、私は貧民窟に入りました。それから十三年経ちました。十三年目に改造社の山本実彦氏が、貧民窟の私の事務所にやつて来て、その小説を出さうぢやないか、と云はれたので、私は、『死線を越えて』上巻の後の三分の一を新しく書き加へたのでした。その時に、前の三分の二の文章があまりにごつごつしてゐて拙いと思つたのですが、妙なもので、一つ直さうと思へば、全部直さなければならなくなるし、十三年後の私の筆は、よほど昔よりは上手になつてゐるやうでしたけれども、何だか血を啗いた頃に書いた物は、ほんとに厳肅で、その頃の私の気持が最も真面目に出てゐるものですから、私は文章よりか気持を取りたいと思つて、文章の拙いことを全く見逃すことにして、厳肅な血を啗いた時の気持を全部保存することにしたのでした。(中略) モデルに就いては云へない多くの事情があるのです。(後略)

賀川豊彦は、「『死線を越えて』を書いた動機」において、小説を書きたかつた第一の理由として、「過去の悲しい経験があまりに深刻に響いたこと」と述べている。その「悲しい経験」とは、妾の子として生まれたこと、母が芸者だったこと、父母を早くに亡くしたこと、そして自由恋愛し失恋したことであらう。

さらに注目したいのは、「その前の年だつたと記憶します。私は小説が書きたかつたので、古雑誌の上に小説を書き綴つたことがあります」である。明治41年5月、19歳の賀川豊彦は、咯血後に転地療養した愛知県蒲郡で「鳩の真似」を執筆したが、実際はその一年前から、小説を書いていたことがわかるからである。その最初の小説に関しては、「矛盾録—賀川豊彦・明治学院在学時代の日記—」<sup>(5)</sup>に詳しいので、併

せて引用しながら考察する。

明治三十九年十月／小説一千頁　九日／一日平均二十頁を書き来って百頁に垂々とす。然るに此進歩なれば千頁計りでも四十五日間を要す。然るに過去の経験によれば二千頁に余る事適合なり。(中略) 共に明治の大著述を、社会主義と宗教哲学とキリスト教との真理を弁明する為に働かざるべからず。

十一月七日／『再生』なる小説に手を着けてより早や一ヶ月は経ぬ。(中略) 書き上げし所三百頁に足らず。而も吾人の涙と血のみ。吾人は文字をしらず。唯血を以て世に訴へんのみ。

十一月二十八日／豊彦は朝五時起床してヴァントを読む。六時半ごろ朝食、『再生』に筆を副へぬ(後略)

明治四十年／一月十五日／嗚呼、悩める哉、現代の青年。歴史哲学の研究を廃して、直に純文学に訴へんとわが感情は叫べども……「あ、我悩める者なる哉」。小説の主人公無我主義は何処ぞ。嗚呼腕を撫してしばし待たん。

『死線を越えて(上巻)』の原型として書かれた「鳩の真似」の、最初の試みは、賀川豊彦が明治学院神学部予科在学中の、明治39(1906)年10月からなされた小説「再生」であった。18歳の賀川が、日露戦争後の新時代を生きる現代の青年を主人公にして、「社会主義と宗教哲学とキリスト教との真理」を明らかにする「明治の大著述」を、「吾人の涙と血」をもって書き上げる野心を抱き、小説「再生」に取り組んでいたことがわかる。

賀川豊彦が文学に向かった要因には、木下尚江(1869～1937)の小説『火の柱』(明治37年)、『良人の自白』(明治37年)の影響が大きい。賀川は後に「私は、十七八歳の頃から二十一二歳の頃まで、木下尚江氏

の作品のほとんど総てを読んだやうに記憶してゐる。哲学的であつたその頃の私には、思想的に多少満たされないものがあつたにしても、その感激と明るさと人間愛と、厳肅な社会苦に対する題材の取り扱ひ方に接して、いつも涙なしに尚江氏の作品を読み切ることが出来なかつた」<sup>(6)</sup>と述べている。

小説「再生」の主人公の煩悶を深めたのが、『死線を越えて（上巻）』の女主人公・田宮鶴子のモデルになった女性・五島卷子の存在だった。

二月二十三日／苦しき午前，嗚呼苦しき午前。豊彦は此れ程の苦しき思ひをなしたる事なし。我が胸は壊れ，我身は破れん。先に我身に其の全霊を捧げし人の，行先先に道ならぬ噂を立て給ふには，何とてか悲しまざらん。嗚呼ソクラテスよ，キリストよ。ソクラテスは己が醜妻を忍び，キリストは淫売婦を哀む。／あゝ豊彦また不貞なる妻を愛せざらんや。されど思へば思ふ程苦しき事なる哉不貞なる女，されども豊彦は彼女を引き留むるの権利なし。（中略）然れども豊彦の罪なり，余が罪なり。否社会の罪也。豊彦にして彼女に手紙を送らざりしは軈て墮落の原因となりしならん。（153頁）

三月九日／詩興頗る湧く／大に『再生』に筆を取りたいが時間が惜しい。神戸に行けば自由の天地に清き空気を吸ふ。（中略）それにしても可愛く思ふのは卷子嬢である。卷子嬢は如何に苦しく日月を送って居るであらう。我輩は今は恋に消極である。我輩は貧民を救済せねばならぬ。妻君を持つと貴族的に少々やらねばならぬてふ。（中略）他人に恋はせぬ積りだ。之れは要するに卷子嬢を愛した反動である。我輩は，實際云へば，此斯まで彼女を恋して居るのである。彼女を愛して居るのも——然し虚栄に強き彼女よ。（中略）ラスキンが失恋の為二年勉強も廢したとの事。失恋と

は善き経験なり。人間らしく面白し。(156頁)

三月十六日／恋を思はぬとあって、また、思は無かったときも有ったが、実際は、卷子を、我輩は全く忘れる事が出来ぬのは事実である。卷子を忘れて実際僕は責任がすまない。(中略) 中学の五年級の卒業は卷子の為に犠牲に供した様な者である。熱烈なる恋は、中学卒業を全く犠牲に供した。早熟なる豊彦、哀むべき豊彦！ 此の五年級を犠牲にして捧げし卷子は今如何に。(157～158頁)

三月二十日／不思議なる摂理——二年前の此日は豊彦が徳島から卷子と三十分の涙を以て沈黙の中に別れた者であったが、二年後の此夜は昌樹兄と新しき使命を自覚して抱き合って寝たのである。／矢張り恋しき卷子嬢よ。我輩は此日記を誰に見られても恥とは思はぬ。打開けて何事も正々堂々であるが、巻様の事は夜昼忘れられぬ。我輩にして手紙を送る自由を有して居るならば、卷子様を苦しめないならば。然し彼女は不貞であるか、彼女は何故に我輩に手紙を書かぬか。哀むべき女よ。遂に彼女も女学生流儀か？(158～159頁)

この明治40年2月から3月にかけての日記を読むと、明治38年3月に徳島中学を卒業した賀川豊彦は、五島卷子と将来を約束しながら、それぞれの道に進むために、いったんは別れて生きていたが、卷子に他の男性との噂が立ち、「不貞なる妻」とまで煩悶していることがわかる。そして、恋に因る煩悶だけではなく、「我輩は貧民を救済せねばならぬ」「新しき使命を自覚」する青年——『死線を越えて』の新見栄一像がすぐに見えることにも注目したい。つまり、「『死線を越えて』上巻の」「前の三分の二の文章」(前記「『死線を越えて』を書いた動機」)は、18歳、19歳の10代の作者が明治39年から明治41年にかけて書いた作

品が原型となっているのである。とすれば、少なくとも『死線を越えて（上巻）』は、いったん明治39年から明治41年の日本文学史のなかに入れて、10代の作者の作品として再評価すればよいのではなかろうか。

次に、「理由2」として先に記した、「ベストセラーになったのは、賀川豊彦の描いた主人公・新見栄一だけではなく、女主人公たちにも読者は引き付けられたから」について考察する。

同時代記事「小説で儲つた割前を出せと無頼漢が短刀を閃かして——生蕃伝道の賀川君夫婦（1）」<sup>(7)</sup>に注目したい。

女主人公鶴子は今は大阪郊外に数人の子の母として未亡人生活を営み、主人公たる彼を慕うてゐた可憐な少女玉枝は淪落して今は播州の某地に酌婦となつてゐる、只一人芸妓小秀だけは今は亡き人である（始め彼の小説には「小秀の死」が細やかに記されてあつたのだが、余りに筋のセンチメンタルになるのを惧れて抹殺した）、敬虔な信者、女工の樋口さんが今の賀川夫人春子さんである事は言ふまでもない、『太陽を射るもの』は『死線を越えて』ほどの売行を見せないが夫れでも既に百五十版を越えた。

この記事からは、読者が『死線を越えて』3部作に描かれた女性たち、鶴子、小秀、樋口喜恵子、玉枝、に関心を持っていたことがわかる。さらに、この記事が書かれた1922（大正11）年の時点で、鶴子は「大阪郊外に数人の子の母として未亡人生活を営」んでいること、モデルがいたのか疑問視されていた芸妓小秀は実在し、死亡していたこと。賀川豊彦は「小秀の死」をいったん書いたが、「センチメンタルになるのを惧れて抹殺」したという事実も重要であろう。確かに芸妓小秀は、『死線を越えて』3部作のなかから、不自然に消えて行くからである。

このように、当時の読者が引き付けられていた『死線を越えて』3部



作に登場する、最初の女主人公が田宮鶴子であるが、そのモデル・五島巻子に関する研究はまだない。そこで断片的にはあるが、先行文献からまとめてみる。

まず最初に、賀川豊彦の妻・賀川ハル（1888～1982）は、日記に次のように記した。

一九二〇〔大正九年〕日記／一月三十日金曜

改造の「死線を越へて」を面白く読んだ。嘗つて活字にならぬ時見たが今は一層面白い。晩主人と二人友愛会の代議員会から帰宅して二畳でその話をした。話は進んで小説中の鶴子のことになった。それが事實は巻様だと云ふことで悉しく昔話を聞いた。巻様を永く待つて結婚をし様としたが、病氣と貧乏とを嫌つて、恋人が東京に遊学中他の人に親しくなつた。休暇に帰る度に恋人の態度は變つてゐつたが、でも文通もしてゐた。後に恋人は神戸に來た。東京の學校を終つた賀川は神戸の神學校に入つた。其頃もう一度たしかめたが返事には私は結婚せず独身で送ると云ふのであつた。それで六年待つた恋人は自分の者でなくなつた。茲に全く交際がたたれた。／何でも其後巻様は結婚して子供が出來た。何日主人が會ふた時には五歳位の子供を負ふてゐた。美人だつた巻様は尚美しくなつてゐたと云ふ。米國から歸つた時にも會つた。それは横浜の指路教會で説教をした時だつた。賀川の名前を見て來たので説教が終つて自分の家に来て呉れと云つたが往かなかつたがしきりに泣いてゐた。神戸へ歸つてからも長い詫び狀が來たそうだ。／私は思ふ。病と貧乏とで嫌つたなら今の賀川の名望を知つてどんなに巻様は悲しむだらう。定めて悔いて居ることであろうに氣の毒だ。(後略)<sup>⑧</sup>

妻ハルの日記の「事實は巻様だと云ふことで悉しく昔話を聞いた」を読むと、『死線を越えて』3部作に描かれた田宮鶴子像と重なる。

次に、武藤富男は、「神戸市須磨区高倉台に住む九十二歳の仲野（旧姓小山田）澄さんという婦人からの便りで、鶴子さんのモデルは、賀川及び森徳太郎、仲野さんとともにマヤス博士から洗礼を受けた五島卷子という方で、澄さんは当時マヤス宅に泊まっております、右の三人とともに勉強したと証言している」<sup>(9)</sup>と記す。

さらに、黒田四郎は、牧茂氏から聞いた話として、「日本基督徳島教会に出席していた女性のうちで、ひと際目立って美しい人」「会衆の前で彼女の弾くオルガンの調べの神々しさ」「卷子さんの父君は有名な実業家」「家は徳島公園の東にある市役所前にずらりと立派な家が揃っている地区にあった」「二人は同じ徳島県板野郡の堀江村で育ち、同じ堀江南小学校に通学し、一緒に学び共に遊んだ竹馬の友であった。年齢も同じなので、共に野道をかけっこをしたり、ままごとを一緒にした仲間なのである」「長じて計らずも県立徳島中学校と県立徳島女学校に入学」「クリスチャンとして交わり合った間柄」「卷子さんも女学校を卒業すると直ちに西下して、広島県の保母伝習所に入学し、そこを卒業した。そして、大阪府吹田市に開設された幼稚園に就職し、その後その幼稚園の経営者ともなり、晩年までその園長として働き、長く吹田市に住んでいた。徳島時代からの親友に、有名な詩人生田春月氏の夫人となった人や、西崎花代女史などの有名人が多く、卷子さんも相当な人物として活躍されたらしく察せられる」<sup>(10)</sup>と、記す。

以上からまとめてみると、五島卷子は賀川豊彦と同年生まれの幼なじみ。徳島女学校を卒業していることからわかるように、当時の女性のなかでは高等教育を受けた新しい時代を生きる女性である。女性文学雑誌『青鞥』（1911～1916）の新しい女たちと同世代でもあり、実際『青鞥』で活躍した作家生田花世と親友とのこと。キリスト者でもあり、保

母として職業に就き、幼稚園の経営者、園長としての幼児教育に生涯を送った女性といえる。

この、五島卷子をモデルとして、賀川豊彦は『死線を越えて（上巻）』において、どのような新しい女主人公・田宮鶴子を描き、さらには鶴子を鏡としてどのような新見栄一像を映し出したのだろうか。

## 2

『死線を越えて（上巻）』の主人公は、言うまでもなく新見栄一である。そして、『死線を越えて（上巻）』には、妾の子・芸者の子として生まれた悲しみ、近代資本主義社会批判、反官僚主義、家父長制批判、一夫一婦制を基本とする自由恋愛賛美、など、賀川豊彦の原点がつまっている。娯楽性もあり、時代の先端をゆく女学生を女主人公にして、自由恋愛、新しい女性像、新しい男性像を描いた点も青春宗教社会小説として新しい。

『死線を越えて（上巻）』は、東京芝白金の明治学院に学ぶ新見栄一が、「もう自分も明治学院を退学して——平凡に然し高貴な理想を以つて現実生活に身を投じなければならぬ」（2章、15頁）と、明治学院を退学して、神戸へ向かう場面からはじまる。

作品内時間は、29章に「明治四十一の最後の日が来た」（129頁）と記されるまで明記されないが、そこから推測すると、栄一が明治学院に別れを告げたのは、明治41年5月となる。出版され、ベストセラーになったのは、大正9年ではあるが、『死線を越えて（上巻）』は、日露戦争後の日本社会を描いた作品と考えてよいであろう。

主人公栄一は、「神戸は彼の出生地である。彼が二十二年前に産れた処である」（3章、15頁）と、22歳に設定されている。『死線を越えて（上巻）』においては、東京（明治学院）、神戸、徳島、が舞台である。

『死線を越えて（上巻）』に、女主人公・田宮鶴子が初めて登場するのは、明治学院を退学して、神戸、徳島へ向った栄一が、徳島市長の父が妾のお梅と暮らすため新築した徳島本町の家に行った時である。

乾を見ると倉の蔭に二階立の家が見える（中略）窓を開いて若い女の人が本を読んで居る。一寸顔を上げてこちらを見る。『ア、美しい女！』と栄一は思ったが、羞しかつたから障子を閉めて茫然何とはなしに考へて居た。（5章、27頁）

徳島の板野郡堀江村東馬詰の本宅で少年時代を過ごした栄一にとって、田宮鶴子は幼なじみでお互い引かれあっていたが、中学に進学してからは音信不通で、7年ぶりの再会であった。本を読む、美しい女としての印象的な田宮鶴子の登場である。その時は、誰か分からず遠目に見ただけであったが、あらためて、栄一は鶴子と教会で出会う。

窺くと第一に目に付くのは子供に讚美歌を教へて居る二十前後か十八九と云ふ、それは綺麗な婦人である。髪をマガレットに結んで、紫の袴を穿いて居る。眼は大きく黒くて、二重瞼の二重顎の福々しい女。その眉の形と云へば全く話に出来ぬ程美しい曲線だ。頬に赤みがあつて淡泊とした女である。（中略）美しい婦人はオルガンの前に腰を掛けて奏き乍ら唱ひ始めた。その歌が新見には身に浸みこむ様によく感ぜられた。（中略）新見は聞いて居ると自分も全く耶穌のお弟子になつてしまつたかと思ふ様な心持がした。鶴子様の高い声が胸を貫く様に鋭い。（9章、44～45頁）

『死線を越えて（上巻）』の女主人公・田宮鶴子は、どのような女性として描かれているのか。鶴子は、クリスチャンであり、高等女学校を卒

業していて、保母になって自立しようとしている。その点で、時代の先端をゆく、いわゆる「新しい女」の一人である。

明治41（1908）年前後の日本文学には、鶴子のような、女学校を出て、近代的自我を持つ、「新しい女」が、ヒロインとして好んで登場する。例えば、二葉亭四迷『其面影』（明治39年）の、ミッションスクールを卒業した小夜子。田山花袋『蒲団』（明治40年）の、神戸女学院に学んだ作家志望の横山芳子。島崎藤村『春』（明治41年）の、明治女学校を卒業した勝子。夏目漱石『三四郎』（明治41年）の、美禰子もクリスチャンで女学校を卒業している。作家も読者も、文学のヒロインに、女学校を卒業している、クリスチャンの「新しい女」を求めている時代でもある。

そもそも、田宮鶴子は、栄一の板野郡堀江村時代の幼なじみで、遠縁でもあった。父・田宮誠は士族で村長をしていたが、数年前に役場の金を使い込み自殺、母も気が狂って入水自殺。鶴子は、徳島で師範学校の教師をしている叔父に養われ女学校を卒業した。このように、単なる恵まれた家庭環境のもと成長した「新しい女」ではなく、苛酷な現実におかれた女性として設定されている。保母となり自立するため、六月の末には広島へ行く予定の鶴子は、その内面を栄一に次のように吐露する。

親類ではもう年だから外へ遣りたいと云ふし叔父の方では高等師範へ行けと云ひますしね、私は神戸の女学院か東京の女子学院へでも這入つてみたいのでせう。ほんとに苦しくてね。（14章、68頁）

親類からは結婚することを求められ、叔父からは高等師範へ進学して女学校の教師になることを期待されているが、鶴子はミッションスクールに行って、もう少しのびのびと青春時代を謳歌したいのである。

栄一が鶴子に引かれる理由の一つに、鶴子が自分の意見をはっきり口にできる、対等な存在としての女性であったことがある。妾であった栄一の実母の死後、さらに妾のお梅を家に入れた父に対して、『私ね、父がね。あの様な汚れた女を相手にして田舎のお母様を泣かして居られるのを見るに忍びないでせう』と不満を抱いている栄一を、鶴子は次のように諭す。

『あの、アウガスチンがね、悔改めて信者になつたのは妾に励まされたのださうですね？（中略）愛するものがあるので、どれだけ人間は柔和になつて居るか知れませぬよ。妾だからつて排斥するとまた反つて、お父様のお気に触つてどんな事が起るかも知れませぬよ——』鶴子は如何にも知恵者らしく語り出した。栄一は恋しい女から此様な言葉を聞くのがうれしくて堪らぬ。（中略）『私はクリスチヤンだから厳格に、一夫一婦主義を守りたいのですよ。でも私は私の愛した人なら、その人が、たとへ何の様な女と罪を犯しても決して捨てませぬわ。（中略）』『だから、お梅様を、今の所独り愛していraftしやるのならそれで善いでせう』（14章、66～67頁）

このように、自由恋愛を誇り、将来を誓い合いながらも、鶴子は広島県の保母養成所へ、栄一は貧民窟へと、いったん二人はそれぞれの自立を目指して別れる。そんななか、栄一のもとへ鶴子から手紙が来て、栄一は衝撃を受ける。

読んで行く中に栄一は手足が震へて胸が轟くことを感じた。鶴子はもう自分を馬鹿にし切つて居るやうだ。一生独身主義で送ると云ふことを繰返して書いて居る。そして何かその文字の下には、

新見の家庭に対して不満である様なことも書いて居る。(中略) 栄一は地球から抛り出された様な気がした。(中略) 栄一は鶴子に裏切られたことを口悔しく思つた。然し仕方がない。『校則』『校則』と繰返して以後は文通が出来ないからと書き、之は消燈後廊下の電燈の光で夜半に書いたのだと書き足して居る。(中略) 泣いても泣いても足りない。頬の筋肉がピリ　　する程泣いたが、まだ足らぬ。そして唯、身が慄へる。(22章, 109～110頁)

作品中に、具体的に鶴子の手紙の内容が記されていないので、栄一の受けた衝撃は理解しにくいだが、おそらく鶴子は広島で保母養成所に通うなかで、「貧民救済」を目的とする栄一の人生とは、共に歩いてゆけない自分の本心を発見したのではなからうか。「一生独身主義で送る」と繰り返す鶴子の本心を知り、栄一は「裏切られた」と悔しく思うが、自分の本心に忠実になれた鶴子は、やはりこの時代の「新しい女」である。

『死線を越えて (上巻)』に、鶴子が最後に登場するのは、46章である。栄一が「貧民問題を通じて、イエスの精神を發揮してみたい」(32章, 143頁)と、貧民窟で生活を始めてからの再会であった。

そして鶴子も何だか元気がなささうに見えた。その日鶴子は広島から阿波へ帰る処であつた。

『ほんとに、出来ない真似ね』と鶴子は軽く答へて居る。少しも油が乗らない。

そこで、栄一はすぐ突き込んだ。

『鶴子さん、あの問題どうして下さるの?』

『あの問題ですか? 叔父が妙なことを云ひますからね、私今の駄目です、私はもう一生結婚しない積で居るのです。今度思ふことがあつて山の中へ這入る積りなのです……』

『山の中へ？ 何処の？』

『小学校の先生にでもなつて、何処かの山の中へ這入らうと思つて居るのです』（中略）『あなたが、さう仰しやると、私何だか苦しいわ。私は、あなたの様な聖い方の真似は出来ないと思ひますわ……』

鶴子は、早や眼に涙を浮べて、唇を妙に噛みしめて居る。（中略）『新見さん、どうか許して下さいね、どうぞね』と一緒に歩いて来た。

それで栄一は、

『許してくれも何もありませんよ、凡ては、神様の御心のうちにあるのですから、あなたは、あなたの方向へ進んで行つて下さい。私は、貧民窟で一生送つて、そこで死ぬ積りで居るのですから……神様はあなたをも、私をも守つて下さいますよ』（中略）鶴子は、

『私は、何にも今云ふ勇気がありません、私は穢れたつまらぬものですから……それでは、新見さん、さよなら……』と切れ切りに。（中略）

眼と眼とが会つた時に、栄一は神秘の極度に包まれて居る様な気がした。鶴子の秀でて叡智に充ちた美しい頬に何処となく憂ひが漂うて居た。

ここに描かれた鶴子は、「許して下さい」「私は穢れたつまらぬもの」と、歯切れが悪い。まるで、ヒーローを裏切って、墮落して行くヒロインのようでもある。恐らく、この部分は後で書き足したものであろうが、先に述べた、明治41（1908）年前後の日本文学に描かれた、女学校を出て、近代的自我を持つ「新しい女」たちが、自由恋愛に挫折し、自立できずに結婚して本来の夢を諦める姿と重なってくる。



『死線を越えて（上巻）』の女主人公として、鶴子がこのように挫折する「新しい女」に描かれてしまった反面、栄一のヒーロー像を引き立てているとも言えよう。

## おわりに

以上みてきたように、『死線を越えて（上巻）』における女主人公・田宮鶴子は、「新しい女」の一人として、男主人公・栄一と自由恋愛する。栄一は鶴子の美しさ、大胆な発想、大胆な行動にひきつけられつつも、「貧民救済」を人生の目的と自覚してゆく。その過程で、鶴子への恋に対する懐疑を抱く自分を発見したりもする。

作中では、栄一が失恋する形に描かれているが、「あなたは、あなたの方向へ進んで行って下さい」（46章）と、鶴子に別れの言葉を述べたように、単なる失恋というだけではなく、自己確立の青春期を生きる男女が自由恋愛しながら、それぞれ別の人生の目的を発見し、生きる道が違っていたことに気づき、次の一步をふみ出そうとする姿を描き出した点に、『死線を越えて（上巻）』の鶴子像と栄一像の新しさがあったと言えよう。

本稿では、「理由3」にあげた「家父長制社会の犠牲となった女性」についてふれることが出来なかったが、他の女主人公である、芸妓小秀、玉妓、義母たちを論じる時に、あらためて考察したい。

**付記** 賀川豊彦『死線を越えて（上巻）』の引用は、『賀川豊彦全集 第14巻』（キリスト新聞社、1964年2月）に拠る。ルビは省略し、旧字体は新字体に改めた。

## 注

- (1) 『死線を越えて（上巻）』（初出は21章まで『改造』大正9年1月～5月連載。大正9年10月，改造社），『死線を越えて（中巻）太陽を射るもの』（大正10年11月，改造社），『死線を越えて（下巻）壁の声きく時』（大正13年12月，改造社）。
- (2) 太田善男「初春の文壇」『読売新聞』大正9年1月1日。引用は『文藝時評大系 大正篇』第八巻，ゆまに書房，2006年，23頁。
- (3) 「解説」『賀川豊彦全集 第14巻』キリスト新聞社，1964年2月，632頁。
- (4) 『黎明を呼び醒ませ』第一書房，昭和12年。引用は『賀川豊彦全集 第22巻』キリスト新聞社，1964年，202頁。
- (5) 解説 平林武雄『明治学院百年史資料集・第2集』明治学院百年史委員会，1975年，147～152頁。
- (6) 「『良人の自白』の感想」『黎明を呼び醒ませ』第一書房，昭和12年。引用は『賀川豊彦全集 第22巻』キリスト新聞社，1964年，204頁。
- (7) 1922年，出典不明。引用は『賀川ハル史料集 第1巻』三原容子編，緑蔭書房，2009年，366頁。
- (8) 『賀川ハル史料集 第1巻』三原容子編，緑蔭書房，2009年，252～253頁。
- (9) 「四人の女性」『評伝賀川豊彦』キリスト新聞社，1981年，64頁。
- (10) 「賀川先生の初恋の女性について」『私の賀川豊彦研究』キリスト新聞社，1983年，406～409頁。

## 参考文献

- 横山春一『賀川豊彦伝』（警醒社，1959年）  
黒田四郎『人間賀川豊彦研究』（キリスト新聞社，1970年）  
黒田四郎『私の賀川豊彦研究』（キリスト新聞社，1983年）  
武藤富男『評伝賀川豊彦』（キリスト新聞社，1981年）  
雨宮栄一『青春の賀川豊彦』（新教出版社，2003年）  
雨宮栄一『貧しい人々と賀川豊彦』（新教出版社，2005年）  
加藤重『わが妻恋しー賀川豊彦の妻ハルの生涯』（晩聲社，1999年）  
岩田ななつ『文学としての青鞥』（不二出版，2003年）  
辻橋三郎「賀川豊彦の小説」（『日本文学』1959年7，8月）

賀川豊彦『死線を越えて』論

- 辻橋三郎「賀川豊彦の文学」(『近代日本キリスト者文学論』双文社, 1978年)
- 飛鳥井雅道「賀川豊彦の位置—大正文学の転機として」(『歴史評論』113号, 1960年1月)
- 武藤富男「解説」(『賀川豊彦全集 第14巻』キリスト新聞社, 1964年2月)
- 関口安義「賀川豊彦の文学」(『日本文学』15巻2号, 1966年2月)
- 佐藤泰正「賀川豊彦の文学——『死線を越えて』三部作を中心に」(『日本近代文学』16号, 1972年5月)
- 笠原芳光「賀川豊彦の文学」(『賀川豊彦の全体像』神戸学生・青年センター出版部, 1988年12月)
- 義根益美「賀川豊彦『空中征服』の系譜」(『賀川豊彦学会論叢』18号, 2010年6月)
- 「賀川豊彦没後50年記念特集」(『雲の柱』25号, 2011年3月)
- 五十嵐伸治「『死線を越えて』の一考察」(『大正宗教小説の流行』論創社, 2011年)